



きよつとまた
散歩日和

13

よ、富士と三郎の里



木更津にやってきた。快速で東京から一時間と少し。遠いようでもあれば、近いようでもある。時間的には近いのだが、心理的には遠い気がする。JR駅からまっすぐ港にのびるのが富士見通りで、たしかにほぼ正面に富士山が見える。東京で見るとグンと大きい。より遠くへきたはずなのに、より大きく見るとはどいうことだろう。

首をひねりながら歩いていくと、商店街のアーケードに「与三郎通り」とあって、白塗りのイナセな男のポートルートがついている。歌舞伎では「切られの与三」で知られており、正式の外題は「与話情浮名横櫛」。伊豆屋与三郎、転落の物語。江戸元山町の鼈甲

組みにのった立派なもので、お堂のつくりになっており、もはや与三郎菩薩である。

裏手にあたる選擇寺には蝙蝠安が眠っている。こちらにもまた実在のモデルがあつてのこと。ただその人は遊び好きではあれ、筋目正しい人だったのに、なぜか死後は横つらにコーモリのマークをつけた小悪党にされてしまった。

参道わきに「軍用兎之碑」を見かけた。ウサギと軍との結びつきが奇妙だが、きつと軍の医学実験か何かに大量に殺されたのだ。おとなりは「木更津警察発祥の地」記念碑。ほかにもいろんな碑が並んでいる。まわりには戸隠神社、東岸寺、愛染院、八剣八幡神社、弁財天、厳島神社、證誠寺、成就寺と、神社仏閣も並んでいて、港が人と物流の中心だったころ、この辺りが町の後背地にあたり、信仰エリアにあてられたことが見てとれる。

富士見通りにもどってプラプラ行くと港に出た。木更津港内港といって、新しく整備されたもの。旧港は少し北に突き出た出島のわきで、コンピラさまの常夜灯が目じるし。舟着き場は「北河岸」ともよばれている。

屋の養子が木更津とかかわるのは、放蕩の末に親戚預りとなって当地へきたからである。港の顔役の女房といつしかワリない仲になり、密会が見つかってメッタ斬りにされ、命はなんとか助かったが、顔に三筋の疵が残った。やくざ者蝙蝠安の弟分になって強請に出かけた先で、はからずもかつての女とバッタリ出くわした。そのとき口にした恨みごとが、有名な「しがねエ恋の情が仇」。

富士見通りに面した光明寺に「与三郎の墓」がある。レッキとした墓地に芝居の登場人物の墓地があるのもヘンな具合だが、モデルになった人がいて、その人の墓がいつしか舞台の人物とすりかわったのだろう。石

記憶の底から、あの歌がアワつぶのように浮かんでくる。

粋な黒塚 見越しの松に
あな姿の 洗い髪

春日八郎の「お富さん」が大ヒットしたのは、たしかこちらが中学二年のときである。ある日、音楽の授業の前に呉服屋の小池と「死んだはずだよ お富さん」のパートを、「おっとみっさ〜ん」と気どったりズムをつけて歌っていたところ、ドアが開いた。音楽は女性教師の担当だったが、烈火のごとくに怒り、小池のエリ首をとって教壇に引き出すと、噛みつくようににらみつけた。いまもってよくわからないのは、中学生がたかだか流行歌を口ずさんでいただけで、彼女はどうしてあんなに怒ったのだろうか。それに二人が手を上げたのに、どうして怒りを呉服屋の俵だけに向けたのか？

たしかに小池は悪いヤツで、掃除は要領よくサボるし、仲間の悪口は言いふらす。クラスきつての情報通で、国語の新任教師と社会科の古参女性教師とがアヤシいとらんでいた。どうして音楽の担当があんなに怒ったのかと小池にたずねると、彼はいつもの関西弁